

「イタリア古典歌曲」研究（3）

——《カロ・ミオ・ベン》の作曲者、トンマーズ・ジョルダーニ——

Arie Antiche Study (III): Tommaso Giordani, the Author of *Caro mio ben*.

中 卷 寛 子

NAKAMAKI Hiroko

The popular song *Caro mio ben* has been attributed to both Tommaso and Giuseppe Giordani, and its authorship has remained unresolved. However, a previously unknown document has finally revealed the composer of this work. The document in question is the receipt for the payment made to the author by the publisher John Preston for *Caro mio ben* and two other works. The author's signature can be read as "Thos. Giordani." Now one can conclude that Tommaso Giordani is the author of *Caro mio ben*.

Beside the printed score published in London, some early manuscripts of *Caro mio ben* have been found in Italy. They bear the names of Ferdinando Bertoni or Georg Friedrich Händel as the composer. The reasons for these misattributions are also discussed.

キーワード：イタリア古典歌曲、《カロ・ミオ・ベン》、トンマーズ・ジョルダーニ

Arie antiche, *Caro mio ben*, Tommaso Giordani

はじめに

数ある「イタリア古典歌曲」の中でも、人気、知名度、いずれの点においても群を抜いた存在と言えるのが《カロ・ミオ・ベン *Caro mio ben*》である。飾り気のない旋律に乗せて、恋する人に対する想いをひたむきに訴えかけるこの曲は、長年にわたって世界中で愛され、歌い継がれて来た。ところが、その高い人気にもかかわらず、この曲の作曲者はこれまで曖昧なままになっていた。

《カロ・ミオ・ベン》の作曲者としては、従来から、ジュゼッペ・ジョルダーニ Giuseppe Giordani (1751-1798) とトンマーズ・ジョルダーニ Tommaso Giordani (1730/33-1806) の名が挙げられて来た。しかし、そのいずれが真の作者であるのかという問題については、決定的な証拠を欠くため、

未だに結論が出ていなかったのである。だが、幸いなことに、筆者は大英図書館でこの問題を解決に導くことのできる新資料を発見した。そこで、本稿ではその資料を紹介し、《カロ・ミオ・ベン》の作曲者を明らかにして行く。

その前に、まずはこの《カロ・ミオ・ベン》の作曲者をめぐる混乱の原因と、この問題に関するこれまでの研究の経過を整理しておくことにしよう。

1 《カロ・ミオ・ベン》の作曲者をめぐる混乱

そもそも、《カロ・ミオ・ベン》の作曲者をめぐる混乱は、トンマーズとジュゼッペ、二人のジョルダーニの経歴の混同と、それに伴う彼らの作品全体の混同という問題の一環として起こったものであった。すなわち、両者はいずれもナポリの出身なのだが、トンマーズは早くからイタリアを離れてイギリスに渡り、同地で作曲と編曲を中心とした音楽活動を行った。一方、ジュゼッペはというと、生涯を通じてイタリアを離れたことはなく、主にオペラの作曲家として名を知られる存在となった。ところが、長年のイギリス生活ゆえに、大陸でまったく知名度の無かったトンマーズの作品が、ファースト・ネームを欠いた「ジョルダーニ氏 Sig. Giordani」名義のもと、イギリスやフランスで出版された印刷譜として大陸に出回ると、まずはゲルバー Ernst Ludwig Gerber (1746-1819) が、その作品の多くをジュゼッペのものとして誤解し、自らが編纂した新旧の音楽事典にそう記した。¹ そして、その誤りはフェティス François-Joseph Fétis (1784-1871) の事典にも受け継がれた。² しかも、その間には、ジュゼッペの作品が遠く離れたイギリスで出版されたことを説明するために、ジュゼッペはトンマーズの兄弟であり、一家を追いかけて渡英したという架空の経歴までもが徐々に作り上げられ、19世紀の後半にはそれが定説となってしまったのである。

こうした、二人のジョルダーニの経歴と作品をめぐる誤解に転機が訪れたのは、20世紀に入って間もなくのことであった。1904年、当時、大英図書館の司書であったウィリアム・バークレイ・スクワイア William Barclay Squire (1855-1927) は、個人的な意見としながらも、イギリスで出版されたほぼすべての作品は、トンマーズのものと考えべきであると主張した。³ さらに、その50年後に出版された『グローブ音楽事典』の第5版で、ジュゼッペ・ジョルダーニの項目を執筆したアルフレッド・ローウェンバーグ Alfred Lowenberg (1902-1949) は、スクワイアの主張を再度採り上げ、これに大筋で同意した。ところが、ローウェンバーグは《カロ・ミオ・ベン》については別途言及し、これをトンマーズの作品と断定するには疑問があるとした。その理由について、ローウェンバーグは、この曲はイタリア出身の名歌手、ガスパーロ・パッキエロッチィ Gasparo Pacchierotti (1740-1821) の演奏によって普及した形跡があり、彼によってイタリアからもたらされた可能性があるからだ述べている。⁴

その後、20世紀も終わりに近くになって、《カロ・ミオ・ベン》の初期楽譜資料を採り上げながら、その作曲者問題に焦点を絞った論文が二つ発表された。⁵ 中でも、1981年に発表されたペイトン John Glenn Paton の論文は、二種類ある《カロ・ミオ・ベン》のロンドンでの初期出版譜の

表1 《カロ・ミオ・ベン》 ロンドンでの初期印刷出版譜

	タイトル
1	<i>[Caro mio ben.] The favourit Song as sung by Sigr Tenducci at the Pantheon & Mr Abel's concert &c. Composed by Sigr Giordani ... Printed for the Author by John Preston at his Music Warehouse No 97 near Beaufort Building Strand (London: J. Preston, [1782]).</i>
2	<i>Caro mio ben. A celebrated Song, sung by Sigr Pacchierotti ... at the Concert, for the Musical Fund at the Opera House; Composed by Sigr Giordani (London: J. Preston, n.d.).</i>

うちの一つで、ソプラノ歌手のジュスト・フェルディナンド・テンドウッチ *Giusto Ferdinando Tenducci* (c.1735 -1790) によって、「パンテオンとアーベル氏のコンサートで歌われた」と表紙に記されているものに注目した(表1の1)。そして、有名なバッハ=アーベル・コンサートが、カール・フリードリッヒ・アーベル *Carl Fridrich Abel* (1723-1787) の単独開催となったのは、共同主催者であったヨハン・クリスティアン・バッハ *Johann Christian Bach* (1735-1782) が没した1782年のみであったことを指摘し、この1782年のテンドウッチの演奏こそが《カロ・ミオ・ベン》の初演であったと推定した。そして、この年代以前にイタリアでこの曲が演奏されたという証拠が見つかるまでは、「トンマーゾ・ジョルダニーが《カロ・ミオ・ベン》を作曲したとする方が確実だと言える」と主張した。⁶

確かに、ペイトンのこの主張はかなり説得力のあるもので、この論文の発表以降、実用譜やCD、インターネット上の情報にも《カロ・ミオ・ベン》の作曲家としてトンマーゾの名を記載する例が目立つようになった。しかしながら、ペイトン自身も認めているように、これは別の「証拠が見つかるまでは」といった限定付きの、暫定的な結論であった。それゆえに、この《カロ・ミオ・ベン》の作曲者をめぐる問題は、今なお完全な解決にまでは至っていないというのが、研究者たちの間での一般的な見方なのである。⁷

2 《カロ・ミオ・ベン》の作曲家

(1) ロンドンの出版譜—— 新資料が明かした作曲家

それでは、いよいよ《カロ・ミオ・ベン》の作曲家の解明に入ることにしよう。作曲家解明のカギを握っていたのは、やはりロンドンの初期印刷出版譜であった。ところが、実際には、ロンドンの出版譜は二種類あり、そのうちの 하나가、ペイトンが初演の際のものとして推定した、テンドウッチの名が表紙に記されているもの(表1の1)だったのである。そして、これとは別に、パッキエロッチが演奏したと表紙に記されているもの(表1の2)が現存しているのだが、おそらくはこれ

こそが、ローウェンバーグが《カロ・ミオ・ベン》は、パッキエロツティの歌唱によって普及した形跡があると述べている理由であったものと思われる。

上記、二つの楽譜はいずれもロンドンにあった出版社、ジョン・プレストンから出版されたもので、《カロ・ミオ・ベン》の曲自体は、どちらも歌唱声部と弦楽四声部の伴奏から成っている。しかも、この二つの楽譜は表紙こそ違え、楽譜そのものは同じ原版を使用したかのように酷似していた。一見して判る大きな違いと言えば、パッキエロツティが歌ったと記されている方にだけ、イタリア語の歌詞に加えて、英語の歌詞が付されていたことぐらいである。

それでは、パッキエロツティが歌ったと記されている楽譜は、一体いつ演奏され、いつ出版されたものなのだろうか。テンドウッチのそれよりも先なのだろうか。しかし、残念ながら、この楽譜については、その表紙に記されている「音楽基金のためのコンサート for the Musical Fund」という記述から、その演奏が遅くとも 1784 年までに行われたものであったことは判ったが、演奏とそれに続く楽譜出版の正確な年代特定にまでは至らなかった。⁸

パッキエロツティの演奏が先だったのか、それともテンドウッチの演奏が先だったのか。また、たとえテンドウッチの演奏やその楽譜の出版の方が先であったとしても、パッキエロツティと同じく、イタリア出身のテンドウッチが故国から持って来た曲であった可能性は無いのか。残念ながら、二つの楽譜の表紙から得られた情報のみでは、そこに様々な疑問が残った。しかし、それらを一気に解消してくれたものこそが、筆者が大英図書館で発見した新資料であった。その資料とは、作曲者が《カロ・ミオ・ベン》を含む数曲の所有権を、出版者であるジョン・プレストンに売り渡した際の代金の領収書で、その内容は以下のとおりであった。⁹

London 15th april 1782

Rec.^d of Mr John Preston the sum of Thirty Pounds, in full of all demands for the property of my songs composed by me in the comic opera call'd the Baccio, as well to the two songs, as sung by Mr Tenducci this season at the Pantheon and Abels Concert, Namely Queen Mary — and Caro mio Ben, also to the Plates and Copies.

Thos: Giordani

£ 30

ロンドン 1782年4月15日

喜歌劇《ロづけ》のために私が作曲した歌曲、ならびに今シーズンのパンテオンとアーベルのコンサートでテンドウッチ氏が歌った二つの歌曲、すなわち《メアリー女王——》と《カロ・ミオ・ベン》の所有権に関するすべての要求、さらには原版と印刷譜の代価として、30ポンドをジョン・プレストン氏より受け取りました。

トマス・ジョルダーニ

30ポンド

サインこそ英語風のトマスになっているが、これがトンマーゾ・ジョルダーニのものであることには、もはや疑いの余地はない。これによって、《カロ・ミオ・ベン》の作曲者は、間違いなくトンマーゾ・ジョルダーニであったと確認されたのである。それと同時に、ロンドンで出版された二種類の楽譜のうち、テンドウッチが歌ったと記されている方が初版譜であったことも明らかになった。

初版譜表紙の記述と領収書の記載内容とを突き合わせると、この曲の出版が以下のような経過をたどったと推定される。すなわち、トンマーゾ・ジョルダーニによって作曲された《カロ・ミオ・ベン》は、1782年にロンドンで開催されていた予約制のコンサート・シリーズ、「パンテオン・グラッド・コンサート」と「アーベル氏のコンサート」で、ソプラノ歌手のテンドウッチによって演奏された。それとほぼ時を同じくして、作曲家であるトンマーゾが自費で楽譜を制作し、印刷を担当した出版業者、ジョン・プレストンを介して販売を行った。楽譜の表紙に記されている「作者のために印刷 Printed for the Author」は自費出版であったことを、また、作曲家自身の住所ではなく、出版業者の住所が記載されていることは、業者が販売を請け負ったことを意味している。¹⁰ところが、販売開始直後から売れ行きが好調であったのだろう、プレストンはジョルダーニからこの曲の所有権を、原版や、すでに完成していた楽譜の残部と共に譲り受け、以後は自社のもので販売することにした。そして、のちに、パッキエロッチがこの曲を歌ったのを機に表紙をあらため、英語の歌詞を加えて再版した。それが、もう一つの出版譜だったのである。

さらに、初版譜をよく見てみると、「セスティーニ夫人 Sig.ra SESTINI」という文字が、楽譜の第一段目の右肩に印刷されていた。これは、後のパッキエロッチの版では削除されてしまったものだ。ジョヴァンナ・セスティーニ Giovanna Sestini (fl.1774-1791) は、1770年代から1780年代にかけてロンドンで活躍していたオペラ歌手で、トンマーゾ・ジョルダーニは彼女のために曲を書き、そのうちのいくつかを出版している。その中には、《カロ・ミオ・ベン》が作曲されたのと同時期に、ヘイマーケットの国王劇場やコヴェント・ガーデンの王立歌劇場で上演された、《トレフォオルテの男爵 Il barone di Torreforte》(1781)や《アンダルシアの城 The castle of Andalusia》(1782)の中で演奏された曲もある。そのことを考えると、《カロ・ミオ・ベン》もまた、当初はセスティーニが演奏することを前提に作曲され、出版の準備が進んでいたが、何らかの事情でそれが取り止めになり、テンドウッチのコンサートでの演奏用に提供された可能性があると言えるのではないだろうか。

(2) 作曲家トンマーゾ・ジョルダーニ

さて、《カロ・ミオ・ベン》の作曲家であったことが判明した、トンマーゾ・ジョルダーニとはいったいどのような音楽家だったのだろうか。ここで改めて彼の経歴を紐解いてみることにしよう。

トンマーゾ・ジョルダーニの生年は定かではないが、1733年頃にナポリで生まれたと推定されている。《カロ・ミオ・ベン》のもう一人の作曲者候補であった、ジュゼッペ・ジョルダーニよりも20才ほど年長ということになる。いずれもナポリの出身であり、一時期は兄弟と言われたトンマー

ゾとジュゼッペだが、現在では両者の家系には血縁関係はないものと考えられている。

トンマーズの父（ややこしいことに、彼もまたジュゼッペというのだが）は、1745年頃に家族を中心としたオペラ一座を組み、ナポリを出てイタリア国内で興行を行った後に、大陸を北上した。その後、一座は1753年から1756年まではロンドンで興行していたことが知られているが、残念ながら、トンマーズは歌手ではなかったため、彼の名が表に出ることはなく、一座の中で彼がどのような役割を果たしていたのかは明らかになっていない。ただ、一座がロンドンで最後に上演した《歌手になった喜劇女優 *La commediante fatta cantatrice*》（1756年1月12日初演）が、トンマーズの作曲によるものであったということだけが、この時期の彼に関する確実な情報として知られている。そして、この作品を上演したのち、約8年にわたってジョルダニー一座の消息は不明となる。

1764年、ジョルダニー一座はダブリンのスマック・アリー劇場に出演した。そして、これを機に、トンマーズはダブリンでオペラ作曲家として本格的な活動を開始する。ちなみに、のちに《カロ・ミオ・ベン》の初演者となるテンドウッチは、1766年にスマック・アリー劇場で上演されたトンマーズの二作品、《みせかけの愛 *Love in Disguise*》と《中国の英雄 *L'eroe cinese*》に出演していた。その後、トンマーズは1769年までをダブリンで過ごしたが、翌1770年には活動の場をロンドンに移した。

トンマーズが移り住んだ当時のロンドンは、ヨーロッパの数ある大都市の中でも、特に活発な音楽活動が展開されている街であった。1月半ばから6月初めまでのシーズンには、毎日のようにオペラやコンサートが数多く開催されており、その一方では、家庭で自ら演奏を楽しむ音楽愛好家も多く、彼らを対象とした楽譜の出版も盛んであった。そのロンドンで、トンマーズはヘイマーケットにある国王劇場のオペラ上演に深くかかわって、自作のオペラのみならず、他の作曲家たちとの共作やパスティチオ、既存のオペラへの挿入曲などを、作曲あるいは編曲して舞台にかける傍ら、コンサートや家庭での演奏に供する歌曲や鍵盤作品、室内楽曲、鍵盤楽器の練習曲の作曲、さらにはオーケストラ作品の鍵盤楽器用編曲など、ありとあらゆる種類の音楽制作に携わり、そのうちの少なからぬものを出版している。そうした彼の出版作品のリストからは、ロンドンという巨大な音楽市場を抱えた街で、その需要に応じて実用的な作品を供給し続けた、職業音楽家としてのトンマーズ・ジョルダニーの姿が浮かび上がって来る。そして、《カロ・ミオ・ベン》もまた、そうした彼のロンドンにおける活動の所産の一つだったのである。

《カロ・ミオ・ベン》が出版された翌年、1783年の夏、トンマーズはロンドンを去ってダブリンに戻り、歌手のマイケル・レオーニ *Michael Leoni* (c.1745-1797) と組んで、自らオペラ興行に乗り出した。しかし、これは1シーズンであえなく失敗に終わった。その後のトンマーズは、まずはスマック・アリー劇場で、さらに同劇場が閉鎖された後は、クロー通りの劇場でオペラ制作に関わりながら、次第にダブリンの音楽界で重要な地位を占めるようになって行った。1794年にはアイルランド音楽基金の総裁にも就任した。しかし、1796年に上演された《田舎家の祝祭 *The Cottage Festival*》を最後に彼の創作の筆は止まり、その10年後の1806年に没した。

トンマーズ・ジョルダニーの死後、その名は、彼が生涯にわたって音楽活動を続けたイギリスに

おいてさえも、急速に忘れられて行ったようだ。1879年に出版された『グローブ音楽事典』の第1巻には、「ジョルダニー」の項目こそあるものの、その内容は先に出版されたフェティスの事典を引き写したもので、トンマーズとジュゼッペを混同し、オペラ《ロづけ》を含む、多くのトンマーズの作品をジュゼッペのものとして記している。しかし、作曲者であるトンマーズの名が忘れ去られても、《カロ・ミオ・ベン》だけは、人々に忘れられていなかった。同事典の項目は、「《カロ・ミオ・ベン》は、今なおコンサートで歌われる」と締めくくられている。¹¹

3 ヘンデル作曲？《カロ・ミオ・ベン》—— イタリアの手稿譜¹²

さて、《カロ・ミオ・ベン》の作曲者をめぐる問題にはすでに結論が出た。しかし、表2に挙げたように、イタリアには、ヘンデル Georg Fridrich Händel (1685-1759)、あるいはフェルディナンド・ベルトーニ Ferdinando Bertoni (1725-1813) を作曲者と記した手稿譜が複数存在している。そこで、最後に、これらの手稿譜にジョルダニー以外の人物が作曲者として挙げられている原因について、これまでの調査結果を報告しておこう。

まず、フェルディナンド・ベルトーニ名義の手稿譜だが、これはについては原因は明らかである。表2に挙げた手稿譜のタイトルを見ると判るように、複数の手稿譜に共通する記述がある。それは、「1785年秋にヴェローナでパッキエロッチェが歌った」というものである。そして、さらにその間の事情を詳しく物語っているのが、ヴェローナのエヴァリスト・ダッラバコ音楽院図書館が所蔵する手稿譜（表2の4）に記された、「アルタセルセ」の文字であった。実は、1784年7月にイギリスを離れてイタリアへと帰国したパッキエロッチェは、その翌年、1785年の秋にヴェローナで、フェルディナンド・ベルトーニが作曲したオペラ、《アルタセルセ Artaserse》に出演した。その際に、《カロ・ミオ・ベン》を、このオペラの中でアリアとして歌ったのだ。¹³

パッキエロッチェの役どころは、ペルシャ王セルセの近衛隊長を務めるアルタバーノの息子、アルバーチェ、このオペラの事実上の主役である。アルバーチェは王女マンダーネと身分違いの恋をするがゆえに国外追放となったが、マンダーネへの想いは絶ち難く、夜陰に紛れて王宮に忍び込み、彼女と密会をしていた。夜明けが近づき、マンダーネが別れを惜しみながら立ち去ると、そこにアルタバーノが血に塗れた剣を持って現れる。アルタバーノは王位簋奪をもくろんで、セルセを暗殺したのである。証拠となる剣を隠そうとする父の求めに応じて、剣を自分のものと交換したアルバーチェだったが、王宮からの脱出に失敗し、逮捕されてしまう。当然の成り行きとして、アルバーチェにセルセ暗殺の疑いがかかるが、真実を語ることは父を告発することになってしまうために、彼は口を開くことができなかった。そして、自分を非難するマンダーネに対して、アルバーチェは無実を訴える。《カロ・ミオ・ベン》はまさにその場面、第1幕第14場に、アルバーチェが歌うアリアとして取り入れられた。これがベルトーニ名義の手稿譜が存在する理由で、つまりはオペラ全体の作曲者が、アリアとして歌われた《カロ・ミオ・ベン》の作曲者であると誤解されたのだ。

表2 イタリアに現存する《カロ・ミオ・ベン》の主な手稿譜

(カッコ内の表示は所蔵館と請求記号。所蔵館の記号は RISM に準ずる)

G. F. ヘンデル名義	
1	Cavatina/ Cantata dal Sig:r Gasparo Pacchiarotti/ Musica del Sig:r Hndel [sic]/ L'autunno 1785 Verona/ D. Cerutti. (I-Rsc: A. Ms. 2609)
2	Cavatina/ Del Fù sempre Celebre, il Sig.or/ Federico Hendel/ Cantò il Sig:or Gasparo Pacchiarotti in Verona/ L'autunno 1785. (I-Rsc: A. Ms. 2622)
F. ベルトーニ名義	
3	Cavatina seria/ del Sig:r Ferdinando Bertoni/ Caro mio ben. (I-BGe: E.1.3@10)
その他	
4	Cavatina Nell' Artaserse Cantata in Verona dal Sig:r Pacchiaroti L'Autunno 1785. (I-VEcon: Murari Bra MS 034)

一方、ヘンデル名義の楽譜についてだが、残念ながら、こちらについては確実な原因と言えるものを示す証拠は見つかっていない。しかしながら、状況的に見て、やはり、《アルタセルセ》上演の前年に当たる 1784 年にロンドンで盛大に催された、ヘンデル記念祭の評判が影響を及ぼした可能性が高いと言えるだろう。

ヘンデル記念祭は、ヘンデルの没後 25 周年ならびに生誕（推定）100 周年を記念して、1784 年の 5 月から 6 月にかけて開催されたもので、ウェストミンスター寺院とパンテオンで計 5 回の演奏会が行われた。それらはいずれも非常に壮大な規模のもので、ウェストミンスター寺院での演奏会には 500 名余り、パンテオンでは 200 名ほどの演奏者が出演したという。そして、その頃まだロンドンに滞在していたパッキエロッチィも、パンテオンでの演奏会に参加して、ヘンデルのオペラからアリアを歌った。さらに、ヘンデル記念祭は翌 1785 年にも開催されている。当然、その評判はイタリアにも届いていただろう。それゆえ、パッキエロッチィがロンドンから持ち帰ったアリアを披露するといった情報があれば、それが評判のヘンデルの作品であると誤解されるようなことがあっても不思議ではなかったはずだ。

おわりに

トンマーズ・ジョルダーニの作品である可能性が非常に高いとされながらも、なかなか確証の得られなかった《カロ・ミオ・ベン》であったが、出版者に宛てた領収書の発見によって、ようやくトンマーズが作曲者であることが確認できた。

トンマーズ・ジョルダーニは多作な作曲家であったことが知られている。だが、残念なことに、

今も演奏されているその作品は《カロ・ミオ・ベン》のみである。そして、作曲家としてのトンマゾ・ジョルダニーに対する現在の評価は、ニューグローブあるいはMGGといった音楽事典の彼の項目を見る限り、当時流行の様式を用いて作曲をした人物で、それなりの実力を有してはいるが、個性に乏しいとする点で一致しているようだ。

確かに、トンマゾは、生前からしばしば盗作の疑いをかけられることもあったようで、その作風が個性に乏しいと評されることは、決して不当ではないのだろう。しかしながら、そうした彼の作品の中から、《カロ・ミオ・ベン》のように、2世紀以上にもわたって、歌い継がれて来た曲が現れたこともまた事実である。それを思えば、トンマゾとその作品については、これからも再評価が成される余地はあるのではないだろうか。少なくとも、演奏者の間には、彼の《カロ・ミオ・ベン》以外の作品も知りたいという希望があるはずだ。

註

¹ Ernst Ludwig Gerber, "Giordani (Giuseppe)" & "Giordani (T.)" in *Historisch-Biographisches Lexikon der Tonkünstler (1790-1792)*, reprint, hrsg. von Othmar Wessely (Graz: Akademische Druck- u. Verlagsanstalt, 1977), Teil 1, Sp.508-509; Idem., "Giordani (Giuseppe)" & "Giordani (T.)" in *Neues Historisch-Biographisches Lexikon der Tonkünstler (1812-1814)*, reprint, hrsg. von Othmar Wessely (Graz: Akademische Druck- u. Verlagsanstalt, 1966), Teil 2, Sp.327-329.

² François-Joseph Fétis, "Giordani (Joseph)" & "Giordani (Thomas)" in *Biographie universelle des Musiciens et Bibliographie générale de musique*, 2^e ed., tome 4 (Paris: 1874; reprint, Bruxelles: Culture et Civilisation, 1963), pp.8-9.

³ Robert Eitner, "Giordani" in *Biographisch-Bibliographisches Quellen-Lexikon (1904-1916; 2. verbesserte Auflage, Graz: Akademische Druck- u. Verlagsanstalt, 1960), Bd. 11, S.384.*

⁴ Alfred Lowenberg, "Giordani, Giuseppe" in *the Grove's Dictionary of Music and Musicians*, 5th ed., vol.3 (London, 1953), p.647.

⁵ John Glenn Paton, "Caro mio ben: Some Early Sources," *Nats Bulletin*, vol.38 No.2 (November/ December 1981): 20-22; Emilia Zanetti, "Di alcuni interrogativi intorno a *Caro mio ben*," in *Musica senza aggettivi: Studi per Fedele d'Amico I*, a cura di Agostino Ziino (Firenze: Leo S. Olschki, 1991), pp.61-83.

ザネッティの論文は内容的にはやや散漫であるが、トンマゾ・ジョルダニーの父である、もう一人のジュゼッペを《カロ・ミオ・ベン》の第三の作曲家候補に挙げている点が一部で注目された。

⁶ John Glenn Paton, *op. cit.*, pp.20-21.

⁷ Ugo Gironacci, "Giordani [Giordano], Giuseppe (Tommaso Giovanni)" in *The New Grove Dictionary of Music and Musicians*, 2nd ed., vol.9, p.884; Irena Cholij, "Giordani, Tommaso" *Ibid.*, p.886; Axel Klein, "Giordani, Tommaso" in *Die Musik in Geschichte und Gegenwart*, zweite, neubearbeitete Ausgabe, Personenteil vol.7, Sp.991.

⁸ Simon McVeigh, *Concert Life in London from Mozart to Haydn* (Cambridge: Cambridge University Press, 1993), p.37.

「音楽基金のためのコンサート」は、1739年から1784年まで毎年1回開催されていた。

⁹ GB-Lbl: Add.63814, f.11.

¹⁰ Jenny Burchell, "The first talents of Europe: British Music Printers and Publishers and Imported Instrumental Music in the Eighteenth Century," in *Concert Life in Eighteenth-Century Britain*, ed. by Susan Wollenberg and Simon McVeigh (Aldershot: Ashgate, c.2004), pp.98-100.

¹¹ George Grove, "Giordani" in *A Dictionary of Music and Musicians*, ed. by George Grove (London, 1879-1890; A centenary facsimile edition with a new introduction by Stanley Sadie, Tokyo: Yushodo, 1990), vol.1, p.596.

¹² ヘンデル、あるいはベルトーニを作曲家とする手稿譜はドイツやベルギーにも存在しているが、ここではイタリアの手稿譜を例として採り上げ、説明をする。

¹³ *Artaserse* (Verona: Dionisi Ramanzi, 1785), p.26.